

イオーヌイチ

JONYCH

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫

県庁のあるS市へやって来た人が、どうも退屈だとか単調だとかいってこぼすと、土地の人たちはまるで言いわけでもするような調子で、いやいやSはとてもいいところだ、Sには図書館から劇場、それからクラブまで一通りそろっているし、舞踏会もちよいちよいあるし、おまけに頭の進んだ、面白くって感じのいい家庭が幾軒もあって、それとも交際ができるというのが常だった。そしてトウールキンの一家を、最も教養あり才能ある家庭として挙げるのであった。

この一家は大通りの知事の邸やしきのすぐそばに、自分の持家を構えて住んでいた。主人のトウールキンは、名をイヴァン・ペトロヴィチとあって、でっぷりした色の浅黒い美丈夫で、頬髯ほおひげを生やしている。よく慈善の目的で素人芝居しろうとを催して、自身は老將軍の役を買って出るのだったが、その際の咳せきのしつぷりがすこぶるもって滑稽だった。彼は一口噺ばなしや謎々や諺ことわざのたぐいをどつきり知っていて、冗談や洒落しゃれを飛ばすのが好きだったが、しかもいつ見ても、いったい当人がふざけているのやら真面目まじめに言っているのやら、さっぱり

見当のつきかねるような顔つきをしていた。その妻のヴェーラ・イオーシフオヴナは、瘡^やせぎすな愛くるしい奥さんで、鼻眼鏡をかけ、手ずから中篇や長篇の小説をものしては、それをお客の前で朗読して聴かせるのが大好きだった。娘のエカテリーナ・イヴァーノヴナは妙齢のお嬢さんで、これはピアノに御堪能^{ごたんのう}だった。要するにこの一家の人たちは、みんなそれぞれに一技一芸の持主だったわけである。トゥールキン家の人々はお客を歓迎して、朗らかな、心^{しん}から氣置きのない態度で、めいめいの持芸を披露に及ぶのだった。彼らの大きな石造りの邸はひろびろしていて、夏分は涼しく、数ある窓の半分は年をへて鬱^う蒼^{つそう}たる庭園に面していて、春になるとそこで小夜鶯^{うぐいす}が啼^ないた。お客が家の中に坐っていると、台所の方では庖^{ほうちよう}丁^{てい}の音が盛んにして、玉ねぎを揚げる臭^{にお}いが中庭までぶんぶんして——とこれがいつもきまつて、皿数のふんだんな美味^{おい}い夜食の前触れをするのだった。さて医師のスタールツェフ、その名はドミートリイ・イオーヌイチが、郡会医になりたてのほやほやで、S市から二里あまりのチャリッジへ移つて来ると、やはり御多分に漏れず、いやしくも有識の士たる以上はぜひともトゥールキン一家と交際を結ばなくてはいいかんと、人から聞かされた。冬のある日のこと、彼は往来でイヴァン・ペトロヴィチに紹介され、お天気の話、芝居の話、コレラの話とひとわたりあつた後、やはり招待をかたじ

けのうすることになった。春になって、ある祭日のこと——それは昇天節の日だった——患者の診察を済ませるとスタールツエフは、ちよいと気散じがてら二つ三つ買物もあって、町へ出掛けた。彼はぶらぶら歩いて行つたが（実はまだ自分の馬車がなかった）、のべつこんな歌を口ずさんでいた。——

浮世の杯つぎの涙をば、まだ味わわぬその頃は……

町で食事をしてから、彼は公園をちよつとぶらついた。やがてそのうちにイヴァン・ペトローヴィチの招待のことがおの自ずと思ひ出されたので、ひとつトゥールキン家へ乗り込んで、どんな連中なのか見てやろうと肚はらを決めた。

「ようこそどうぞ」とイヴァン・ペトローヴィチは、昇り口で彼を出迎えながら言った。「これはどうも御珍客で、いやはや実に喜ばしい次第です。さあさこちらへ、ひとつ最愛の妻にお引き合わせ致しますよう。私はこの方かたにこう申し上げているんだよ、ねえヴェーロチカ」と彼は、医師を妻に紹介しながら言葉をつづけた。「こう申し上げているんだよ、この方としたものが御自分の病院にばかり引っこもっておられるなんて、そんなローマ法

があるものじゃない、すべからくその余暇を社交にお割きになるべきだつてね。そうじゃないかい、ねえお前？」

「こちらへお掛け遊ばせな」とヴェーラ・イオーシフオヴナは、お客を自分の傍へ坐らせながら言った。「あなたこの私に慇懃をお寄せ下さいますでしょうねえ。宅は焼餅やきですの、あのオセロなんですのよ。でも私たち、宅に何一つ気どられないようにうまく立ちまわりましょうねえ」

「ええ、この甘つたれの雛っ子さん……」イヴァン・ペトローヴィチは優しくつぶやいて、妻の額に接吻をして、「あなたは実により時においでになったんですよ」とまた客の方へ話しかけた。「わが最愛の妻が一大長編を書き上げましてね、今日それを朗読することになつていきますので」

「ちよいとジャン」とヴェーラ・イオーシフオヴナが良人に言った。「〔dites que l'on nous donne du thé!〕」

スタールツエフはエカテリーナ・イヴァーノヴナにも引き合わされた。これは十八になる娘さんで、すこぶるお母さん似的の、やつぱり瘠せぎすな愛くるしい人だった。その表情はまだ子ども子どもしていて、腰つきも細っそりと華奢だったが、いかにも処女らしい

すでにふつくらと発達した胸は、美しく健康そうで、青春を、まぎれもない青春を物語っていた。さてそれからみんなでお茶を飲んで、ジャムだの蜂蜜だのボンボンだの、口へ入れるとたんに溶けてしまうすこぶるおいしいお菓子だのを風味した。夕暮が迫るにつれてだんだんとお客が集まって来たが、その一人一人にイヴァン・ペトローヴィチは例の笑みこぼれるような眼を向けて、こう挨拶するのであった。――

「ようこそどうぞ」

やがて一同そろって客間へ通って、すこぶる真面目くさった顔つきで席におさまると、いよいよヴェーラ・イオーシフオヴナが自作の小説を朗読するのだった。彼女はこんなふうに始めた。――『凍てはますますきびしくなつて……』窓がみんな一杯に開け放してあるので、台所で庖丁をとんとんいわせる音が聞こえ、玉ねぎを揚げるにおいが漂つて来た。……深々とやわらかなソファはいい坐り心地だったし、客間の夕闇のなかには灯りがいかにも優しげに瞬いていた。そして今この夏の夕ぐれに、往来からは人声や笑いごえが伝わって来るし、庭からは紫丁香花の匂いの流れて来るなかで、凍てがますますきびしくなつて、沈みゆく太陽がその寒々とした光線で雪の平原を照らしたり、ひとり淋しく道をゆく旅人を照らしたりしている光景をしみじみ味わい知れというのは、無理な注文というも

のであった。ヴェーラ・イオーシフオヴナの朗読は進んで、うら若い美貌の伯爵夫人がその持村に小学校や病院や図書館を建て、それから彼女は漂泊の画家に恋してしまう——といったふうな、ついぞこの人生にありようもない絵そら事を読み上げて行くのだったが、それでもやつぱり聴いているのは楽しくいい気持で、脳裡には絶え間なくいかにも立派な安らかな想いが浮かんで来て、——所詮^{しよせん}たちあがる気にはなれなかった。

「悪^あしくもないで……」とイヴァン・ペトロローヴィチが小声で感想を漏らした。

すると客の一人が、拝聴しながら想いをどこやら千里の外に飛ばしていたと見え、やつと聞きとれるほどの声でとんちんかん相づちをうった。——

「いや……実にさようで……」

一時間たち、二時間たった。すぐ近所の市立公園ではオーケストラが音楽を奏^{かな}で、合唱団が歌をうたっていた。やがてヴェーラ・イオーシフオヴナがその手帳を閉じたとき、一同はものの五分ほど沈黙のまま、合唱団のうたっている『*樽^{ほだ}あかり』の唄に耳を傾けていた。この唄は、いまの小説の中にこそなかつたけれど人生にはよくあることを伝えているのだった。

「御作品は雑誌などに発表なさるのですか？」と、スタールツエフはヴェーラ・イオーシ

フオヴナに聞いた。

「いいえ」と彼女は答えた。「どちらへも発表はいたしませんわ。書いては戸棚の中にし
まっておきますの。発表して何に致しましょう?」とその理由を説明して、「だって私ど
もには財産がございますもの」

すると一同はなぜかしら溜息ためいきをついた。

「さあ今度はお前さんの番だよ、猫ちゃん、何か一つ弾ひいてごらん」とイヴァン・ペトロ
ーヴィチが娘に向かって言った。

召使たちがグラランド・ピアノの蓋ふたをもち上げ、もうちゃんと用意のしてあつた譜本を押
しひらいた。エカテリーナ・イヴァーノヴナは席について、両手でもってキーをがんと叩
いた。かと思う間もなく、またもや力任せに叩きつけた。それがもう一ぺん、また一ぺん。
彼女の肩も胸もともぴりぴりと打ち顫ふるえ、しかも執念ぶかくのべつ同じ場所ばかり叩きつ
けている有様は、そのキーをピアノの胴中へ叩き込んでしまわぬうちはとても止めやまいと
思われるばかりだった。客間は雷鳴でいっばいになってしまった。何もかもが一つ残らず
どよめき渡つた——床も、天井も、家具調度も……。エカテリーナ・イヴァーノヴナの弾
いているのは難しい経過バサレジュ句で、まさにその難しさのゆえにこそ面白いといった、長つた

らしく単調なところだったが、スタールツエフは耳を傾けながら、心の中では高い山のう
えから石が降って来る、ばらばらとひっきりなしに降ってくる有様を思い描いて、ああ一
刻も早く降りやんでくれればいいと念じるのだった。と同時にまた、エカテリーナ・イヴ
アーノヴナの姿が——額に落ちかかる髪の毛を振り払いもせず、緊張のあまり薔薇色ばらいろに上
気して、いかにもがっしりと精神的なその姿が、ひどく好ましいものに思えるのだった。
ひと冬をチャリージで、病人と百姓の中に埋まって暮したあとで、この客間に坐って、こ
の若くつて優美な、おまけに恐らくは純潔な生き物をながめ、この騒々しくて退屈きわま
る、とはいえ文化的には違くない物の音を聴ねいているのは、——なんととっても実たのに愉し
い、実にも新しい気分だった。……

「よおし、猫ちゃんや、今日はまた何時いつにない上出来だったぞ」とイヴァン・ペトロロヴ
イチは両眼に涙をうかべて言った。娘が演奏を終えて起たちあがった時にである。「*死ね、
デニース、これ以上のものはもはや書けまい」

一同が彼女をとり巻いて、おめでとうを言ったり、驚嘆してみせたり、あれほどの音楽
は絶えて久しく耳にしたことがないと断言したりするのを、彼女は無言のまま微かすかな笑み
を浮かべて聴いていたが、その姿いっばいに大きく『勝利』と書いてあった。

「素敵ですな！ 素晴らしいものです！」

「素敵ですな！」 スタールツエフも、満座の熱中にばつを合わせて言った。「どちらで音楽をお習いになったんですか？」と彼はエカテリーナ・イヴァーノヴナに聞いた。「音楽学校ですか？」

「いいえ、音楽学校へはまだこれからいるところです。只今のところはこここのマダム・ザヴローフスカヤに習っておりますの」

「あなたはここの女学校をお出になったのですか？」

「まあ、とんでもない！」と彼女に代つてヴェーラ・イオーシフォヴナが答えた。「私もでは先生がたに宅までお出でを願いましたの。なにせ女学校と申すところは、通わせましても寄宿いたさせましても、御案内の通り、悪い感化を受ける心配がございますものねえ。女の子というものは、育ちます間はやはり母親だけの感化を受けるように致しませんでは」

「でも音楽学校へはあたし行きますわよ」とエカテリーナ・イヴァーノヴナが言った。

「いいえ、猫ちゃんはママを愛しておいでだわね。猫ちゃんはパパやママを悲しい目に逢わせはしないことね」

「いや、行きますわ！ あたし行きますわ！」エカテリーナ・イヴァーノヴナはふぎけて駄々をこねながらそう言つて、小さな足をトンと鳴らした。

さて夜食になると、今度はイヴァン・ペトロローヴィチが持芸を披露におよぶ番だった。

彼は眼だけで笑いながら、一口嚙をやつたり洒落を飛ばしたり、滑稽な謎々を出して手ずから解いて見せたりした。しかもものべつに彼一流の奇妙な言葉を使うのだったが、それは永年の頓智修行とんちによつて編み出されたもので、明らかにもう久しい前から習慣になりきっているらしかった。例えば「大々的な」とか、「悪あしくはない」とか、「いやいやしく御礼を」とか。……

ところがまだそれで種たねぎれではなかった。満腹もし満足もした客たちが玄関にどやどやと集まつて、自分の外套やステッキをさがしていると、その周りを下男のパヴルーシャが世話を焼いてまわるのだった。これはパーヴァとこの家で呼びならしている年の頃十四ほどの少年で、いが栗頭で、まるまるした頬ほっぺたをしていた。

「さあさ、パーヴァ、一つ演やつてごらん！」とイヴァン・ペトロローヴィチが彼に言った。

パーヴァは見得を切つて、片手を高く差しあげると、悲劇口調でいきなりこう叫んだ。

「ても不運な女、死ぬがよい！」

で、一同わつとばかり笑い出してしまった。

『面白い』とスタールツエフは表へ出ながら考えた。

彼はまだ一軒レストランへ寄つてビールを飲み、さてそれから徒歩でチャリージの家をめざした。みちみちのべつに唄を口ずさみながら。――

そなたの声がわが耳に、優しくもまた悩ましく……

二里あまりの道を歩きとおして、やがて寢床にはいつてからも、彼はこれっぱかりの疲労も感ぜず、それどころかまだ五里ぐらひは平気で歩けそうな気がした。

『悪しくはないで……』うとうとしながら彼はふと思ひ出して、声に出して笑った。

二

スタールツエフはトゥールキン家へ行こう行こうと思ひ暮しながら、病院の仕事がひど

く多忙で、いつかな手すきの時間が得られなかった。そんなふうで一年あまりの時が勤労と孤独のうちに過ぎた。ところが図らずもある日、町から水いろの封筒にはいった手紙がとどいた。

ヴェーラ・イオーシフオヴナはもう久しい以前から偏頭痛に悩まされていたが、それが最近、猫ちゃんが毎日のように音楽学校へ行く行くと威かすようになつてからは、発作がますます頻繁になつて来た。トゥールキン家へは町の医者が入れ代り立ち代り残らずやつて来たが、とうとうしまいには郡会医の呼び出される番になつたのである。ヴェーラ・イオーシフオヴナの手紙は思わずほろりとさせるような調子で、どうぞ御来駕ごらいがのうえわたくしの苦しみを和らげて下さいましと頼んでいた。スタールツエフはやつて来たが、それ以来というものは繁しげしげ々と、すこぶる繁々とトゥールキン家の鬨しきいをまたぐようになった。∴彼は実のところ少しはヴェーラ・イオーシフオヴナの助けになつたので、彼女はもう来る客来る客をつかまえて、これこそ並々ならぬ素晴らしいお医者様だと吹ふい聴ちようするのだつた。ところが彼がトゥールキン家へやつて来るのは、もはや彼女の偏頭痛なんぞのためではなかつた。……

ある祭日だった。エカテリーナ・イヴァーノヴナは例の長つたらしい、うんざりさせる

ピアノの稽古を終わった。それからみんなは長いこと食堂に陣どってお茶を飲んで、イヴアン・ペトロロヴィチが何やら滑稽な話をしていた。と、その時ベルが鳴った。誰かお客様だから、玄関まで出迎えに立って行かなければならない。スタールツェフはこのひとしきりの混乱に乗じて、エカテリーナ・イヴァーノヴナに向かってひそひそ声で、ひどくどぎまぎしながらこう言った。――

「後生です、願いです、私を苦しめないで下さい、お庭へ出しましょう！」

彼女はちよつと肩をすくめて、さも当惑したような、相手が自分に何の用があるのやら腑ふに落ちかねるといった様子だったが、でも起ちあがって歩きだした。

「あなたは三時間も四時間もぶつとおしにピアノをお弾きになる」と彼はその後からついて行きながら言うのだった。「それが済むとママの傍に坐っていらっしやる。これじゃまるつきりお話をする暇がないじゃありませんか。十五分でも結構ですから私に下さい、願いです」

もうそろそろ秋で、古い庭の中はひっそりとわびしく、並木の道には黒ずんだ落葉が散り敷いていた。もはや黄昏たそがれるのも早かった。

「まる一週間というものお目にかかりませんでしたね」とスタールツェフは続けた。「そ

れがどんなにつらいことだか、あなたが分かつて下すつたらなあ！ まあ腰を掛けましよう。私の申し上げることをおしまいまで聴いて下さい」

二人とも庭の中にお気に入りの場所があつた。枝をひろげた楓かえでの老樹の下にあるベンチがそれだつた。今もそのベンチに坐つたのである。

「どんなお話ですの？」とエカテリーナ・イヴァーノヴナは、愛想も素気もない事務的な口調でたずねた。

「まる一週間もお目にかかりませんでした、あなたのお声を聞くのも実に久しぶりです。私はとてもあなたのお声が聞きたいんです、聞きたくつて堪たまらないんです。何か話をして下さい」

彼女が彼の心を魅し去つたのは、その新鮮さ、眼や頬のあどけない表情によつてであつた。彼女のきものの着こなしまでが、その飾り気のなさや無邪気な雅趣によつて、彼の眼には何かこう世の常ならぬ可憐かれんなもの、いじらしいものに映るのだった。しかも同時に、そんなあどけない様子でいながら、彼には彼女が年に似合わず非常に聡明そうめいな、頭の進んだ女性に見えた。彼女となら彼は文学の話、美術の話、その他なんの話でもできたし、また生活や人間のことで愚痴ぐちをこぼすこともできた。尤も真面目な話の最中に彼女がいきな

り突拍子もなく笑い出したり、家へ駈^かけ込んでしまったりするような場合もあったけれど。彼女はほとんどすべてのS市の娘たちと同様すこぶる読書家だった（一体がS市の人々は至つて読書をしない方だったので、この図書館では、若い娘とユダヤの青年がいなかったら、図書館なんぞ閉鎖してもいいくらいだとさえ言っていた）。この読書好きな点もすこぶるもつてスタールツエフの氣に入つて、彼は顔さえ見れば彼女に向かつて、このごろは何を読んでおいでですかと胸躍らせながら尋ね、彼女がその話をしだすと、うつとりとなつて聴きほれるのだった。

「お目にかからなかつたこの一週間、あなたは何を読んでおいででした？」さて彼がこう尋ねた。「話して下さい、お願いですから」

「*ピーセムスキイを読みましたわ」

「と仰しやると何を？」

「『千の魂』ですわ」と猫ちゃんは答えた。「でもピーセムスキイっていう人、随分おかしな名前だったのねえ、——アレクセイ・フェオフィラクトイチだなんて！」

「おや、どこへいらつしやるんです？」とスタールツエフは、彼女がやにわに立ちあがつて家の方へ行きかけたのを見て、ぎよつとして悲鳴をあげた。「僕にはぜひともお話しし

なけりやならん事があるんです、どうしても聴いていただきたい事が。……せめて五分間でも僕と一緒にいて下さい！ 後生のお願いです！」

彼女はもの言いたげな様子でふと足をとめたが、やがて不器用な手つきで彼の掌に何やら書いたものを押しこむと、そのまま家の中へ駆け込んで、またもやピアノに向かつてしまった。

『今晚十一時に』とスタールツエフは読みとった、『墓地のデメツテイの記念碑の傍において下さい』

『ふむ、こいつはどうもすこぶる賢明ならぬことだて』と彼は、われにかえってそう考えた。『何の因縁があつて墓地なんぞを？ どういう気だろう？』

明らかにこれは、猫ちゃんがからかつていなのだ。逢あひびき引をするつもりなら、街なかでも市立公園でも簡単にできるものを、わざわざよる夜中に、それもはるか郊外にある墓地を指定するなんていうことを、じつさい誰が正気で思いつくものだろうか？ それに、溜息をついたり、書きつけをもらつたり、墓地をうろついたり、今どきじゃ中学生にさえ笑い飛ばされそうな馬鹿げた真似まねをするなんて、いやしくも郡会医であり、賢明にして押しも押されぬ名士である彼たるものに似合わしいことだろうか？ このロマンスは一体どこ

まで人を引つ張つて行くつもりなんだろう？ 同僚に知れたら何と言われるだろう？ とそんなことをスタールツエフは、クラブのテーブルのまわりをぐるぐるまわりながら考えていたが、十時半になると急にあたふたと墓地へ車を走らせた。

彼にはもう自家用の二頭立てもあつたし、パンテレイモンという天鷲絨びろうどのチョッキを着たお抱えぎよしや馭者もいた。月夜だつた。おだやかで暖かだつたが、さすがに秋めいた暖かさであつた。町はずれの屠殺場のあたりで犬の群が吠えていた。スタールツエフは町の尽きるところの、とある横町に馬車を残して、自分は歩いて墓地へ向かつた。『誰にだつて妙などころはあるものさ』と彼は考えるのだつた、『猫ちゃんにしても一風変わった娘だからなあ、——なに分かるもんか——ひよつとしたらあれは冗談じゃなくつて、本当にやつて来るかも知れないさ』——そして彼は、この力ない虚ろうつろな希望に身も心もまかせ切つて、そのおかげでうっとり酔い心地になつてしまつた。

ものの四、五町ほど彼は野道を歩いた。墓地ははるか彼方に黒々とした帯になつて現われ、まるで森か、さもなくて大きな庭園を見るようだつた。やがて白い石垣や門が見えてきた。……月の光をたよりに、その門の上の方に記された文字が読みとられた。『*……のときたらん』というのである。スタールツエフは小門くぐりからはいると、まず第一に目に触

れたのは、ひろい並木路の両側にずらりと立ち並んだ白い十字架や石碑と、それやポプラの木がおとす黒い影とであった。ぐるりを見てもはるか遠方まで白と黒とに塗りつぶされて、眠たげな木々がその枝を白いものかげの上に垂れている。ここは野原の中よりも明るくような気がした。鳥や獣の足によく似た楓の葉が、並木路の黄色い砂の上や墓石の上にくつきりと影を描いて、石碑の文字も明らかに浮かび出ていた。初めのうちスタールツェフは、自分が生涯にいま初めて目にし、そして恐らくもう二度と再び目にする機会はあるまいと思われるこの光景に、すっかり心を打たれてしまった。それは他の何ものにも比べようのない世界、——まるでここが月光の揺籃ゆりかごでもあるかのように、月の光がいかにもめでたくいかにも柔やさしくまどろんでいる世界、そこには生の気配などいくら捜してもありはしないけれど、しかし黒々としたポプラの一本一本、墓の盛土の一つ一つに、静かなすばらしい、永遠の生を約束してくれる神秘のこもっていることの間じられる、そのような世界であった。墓石からも凋しぼんだ花からも、秋の朽葉くちばの匂いをまじえて、罪の赦ゆるし、悲哀、それから安息がいぶいて来るのだった。

あたりは沈黙だった。この深い和らぎの中に、大空からは星がみおろしていて、スタールツェフの足音がいかにも鋭く、心なく響きわたるのだった。やがてお寺で夜半の祈禱きとうの

鐘が鳴りだすと、彼はふと自分が死んで、ここに永遠に埋められているもののように考えた。するとその時はじめて彼は誰かが自分をじつと見ているような気がして、いやいやこれは安息でも静寂でもないのだ、じつは無に帰したものの遺瀨やるせない憂ゆう愁しゆう、抑えに抑えつけられた絶望なのだ、ひとしきりそんなことを考えた。……

デメツテイの記念碑は礼拝堂のような恰かつこう好こうをして、天てん辺べんには天使の像がついていた。いつぞやイタリヤの歌劇団が旅のついでにS市に立ち寄つたことがあるが、その歌姫の一人がみまかつてここに葬られ、この記念碑が建こんりゆう立りゆうされたのであった。町ではもう誰一人その女のことを覚えている人はないが、入口の上のところについている燈明が月の光を照り返して、さながら燃えているようだった。

人影はなかった。まったく誰がこの真夜中にこんな所へやって来るだろう？ しかしスタートルツエフは待つていた。まるで月の光が彼の身うちの情熱を暖めでもしたように、燃えるような気持で待ちつづけながら、接吻や抱ほうよう擁ようをしきりに想像に描いていた。彼は記念碑のほりにものの半時ほど腰かけていたが、やがて帽子を片手にわき徑みちからわき徑へとひとわたりぶらぶらして、依然こころ待ちに待ちながら、こんなことも考えていた——
 一体ここには、その辺の塚穴の中には、どれほどの婦人や少女たちが、かつては美しく轟こ

惑^{わく}にみちて、恋いわたり、男の愛撫^{あいぶ}に打ちまかせて夜ごとに情炎を燃やした身を、ひっそりと埋めていることだろう。まったく母なる自然というものは、何と意地わるく人間をからかうものなのだろう！ それに想い到ると実に腹立たしい限りではないか！ スタールツエフはそんなことを考えていたが、それと同時に彼は、いやいやそんなことは御免だ、是が非でもおれはこの恋を遂げて見せるぞと、大声で叫び出したかった。彼の眼の前にしろじろと見えているものは、もはや大理石の片^{きれ}はしではなくて、その一つ一つがみごと円満具足の肉体であった。彼はそれらの姿が羞^はじらうように樹^こかげに身をかくすのを目にし、その肌の温^{ぬく}もりを身に感ずるのだった。そしてこの悩ましさは切ないほどに募って行った。

……

とその時まるで幕が下りたように、月が雲間にかくれて、あたり一めん遽^{にわ}かに暗くなつた。スタールツエフはやつとのことで門をたずね当て、——何しろ秋の夜の常として今ではもう真つ暗だったので、——それから半時間ほどうろろしながら、さつき馬車を残してきた横町をさがしまわつた。

「ああくたびれた、立つてるのもやつとなくらいだよ」と彼はパンテレイモンに言った。そして、ほっとした気持で馬車の中に掛けながら、彼はふとこんなことを考えた。

『やれやれ、肥りたくはないものだ!』

三

あくる日の夕方、彼は結婚の申し込みをしにトゥールキンへ行つた。ところが生憎のことに、エカテリーナ・イヴァーノヴナは居間に引つ込んで、調髪師に髪を結わせていた。彼女はその晩クラブである舞踏会へ出掛けるところだったのである。

またしても長いこと食堂にすわり込んで、お茶をがぶがぶやっていたいなければならなかつた。イヴァン・ペトロヴィチは、お客が沈み込んで退屈そうにしているのを見ると、チヨツキのかくしから何やら書きつけをとり出して、御領地内の錠前金具ことごとく破損仕り、塗壁も剥落仕り候云々という、ドイツ人の管理人がよこした滑稽な手紙を読み上げた。

『花嫁にはきつと相当な財産がつくだらうな』とスタールツエフは、ぼんやり耳を傾けながら考えていた。

ゆうべ一睡もしなかつたので、彼はふらふらとめまいがして、まるで何か甘つたるい睡

眠剤でも嘸のまされたような状態だった。気持はもやもやしていたが、それでいて妙にうれしいような温ぬくぬく々とした気分で、しかもそのいっぽう頭の中では、何やら冷やかな重くるしい片きれはしが、こんな理屈をこねていた。――

『思いとまるんだね、手後れにならんうちにな！ あれがお前の手に合う女かい？ あれは甘やかされ放題のわがまま娘で、昼の二時まで寝る女なのに、お前と来たら番僧せがれの碎せがれで、たかが田舎医者じゃないか……』

『ふん、それがどうした？』と彼は考えた。『いっこう平気じゃないか』

『それだけじゃない、お前があんな娘をもらったら』とその片はしは続けた、『あれの親類一統はお前に田舎の勤めをやめて、町へ出て来いと言うだろう』

『ふん、それがどうした？』と彼は考えた。『町なら町でいいじゃないか。花嫁についての財産ものがないじゃなし、それで立派に門戸が張れようじゃないか……』

やつこのことでエカテリーナ・イヴァーノヴナが、舞踏会用のデコルテを着込んで可愛らしいすがすがしい姿になってはいつて来たが、するとスタールツエフはすっかり見惚みとれてしまつて、有頂天のあまり一言も口がきけず、ただもう眼をみはったままにやにやしているばかりだった。

彼女が行って参りますを言い始めると、彼も——こうなつてはもうここに居残っている用もないので——立ちあがつて、患者が待つているから家へ帰らなければと言ひ出した。

「致し方もありません」とイヴァン・ペトロローヴィチは言つた、「ではお出掛け下さいだが、ついでに猫ちゃんをクラブまで送りとどけていただきますかな」

そとは雨がぼつぽつ降っていて、ひどい暗さで、ただパンテレイモンのしわが咳をたよりに、馬車のありかの見当がつくほどだった。そこで馬車にほろ幌をかけた。

「わしはお家うちでお留守番、そなたはべちやくちやお出掛けと」とイヴァン・ペトロローヴィチは娘を馬車へ乗せてやりながら言うのだった、「こなたもべちやくちやお出掛けと。……さあ出せ！ さようならどうぞ！」

馬車は動きだした。

「僕はきのう墓地へ行きましたよ」とスタールツェフは始めた。「あなたもずいぶん意地のわるい無慈悲な真似かたをなさる方ですなえ。……」

「あなた墓地へいらしたの？」

「ええ、行きましたとも、おまけに二時ちかくまでも待つていました。えらい目に逢いましたよ……」

「たんとそんな目にお逢いなさるがいいわ、冗談の分からないような方は」

エカテリーナ・イヴァーノヴナは、自分に参っている男を見事に一番かついでやったし、それに人がこれほど熱心に自分に打ち込んで来るので御機嫌ななめならず、ほほほと笑い出したが、とたんにきやつと悲鳴をあげた。というのは丁度そのとき馬がクラブの門を入ろうと急にカーヴを切ったので、馬車がぐいと傾^{かし}いだからだった。スタールツエフはエカテリーナ・イヴァーノヴナの腰を抱きとめた。おびえ立った彼女が、ひたと彼に寄りすがつて来ると、彼はつい我慢がなくなつて彼女の唇や頤^{おとが}に熱く熱く接吻して、なおもぎゅつと抱きしめた。

「もうたくさんだわ」と彼女は素気なく言い放った。

と思つた次の瞬間、彼女の姿はもう馬車の中にはなくて、煌^{こうこう}々と灯のともつたクラブの車寄せ近くに立っていた巡警が、不愉快きわまる声でパンテレイモンをどなりつけた。

「どうしたんだ、この薄のろ？ さつさと出さんか！」

スタールツエフはいったん家へ帰つたが、じきにまた引き返して来た。借り物の燕尾^{えんびふ}服を一着に及び、どうした加減かやたらにばくついてカラーからはみ出そうとするこち

こちらの白ネクタイをくつつけて、彼は真夜中のクラブの客間に坐り込み、エカテリーナ・イヴァーノヴナを相手に夢中でこんなことをしゃべっていた。――

「いやはや、恋をしたことのない連中というものは、じつに物を知らんものですよなあ！

僕は思うんですが、恋愛を忠実に描きえた人は未だかつてないですし、またこの優にやさしい、喜ばしい、悩ましくも切ない感情を描き出すなんて、まずまず出来ない相談でしょうねえ。だから一度でもこの感情を味わった人なら、それを言葉で伝えようなんて大それた真似はしないはずですよ。序文だとか描写だとか、そんなものが何になります？ 余計な美辞麗句が何になります？ 僕の恋は測り知れないほどに深いです。……お願いです、

後生ですから」と、とうとうスタールツエフは切り出した、「僕の妻になって下さい！」

「ドミートリイ・イオーヌイチ」とエカテリーナ・イヴァーノヴナはひどく真面目な顔をして、ちよつと考えてから言った。「ドミートリイ・イオーヌイチ、そう仰しやって下さるのはあたし本当に有難いと思いますし、またあなたを御尊敬申し上げますわ。でも……」と彼女は立ちあがって、立ったまま後を続けた、「でも、堪忍して下さいませぬ、あなたの奥さんにはわたくしなれませんの。真面目にお話ししましょう。ねえドミートリイ・イオーヌイチ、あなたも御存じの通り、わたしは世の中で何よりも芸術を愛して

いますの。わたしは音楽を気持ちがよいように愛して、いいえ崇拜して、自分の一生をそれに捧げてしまいましたの。わたしは音楽家になりたいの、わたしは名声や成功や自由が欲しいんですの。それをあなたは、わたしにやっぱりこの町に住んで、このままずっとこの空虚で役にも立たない、もう私には我慢のできなくなっている生活を、続けろと仰しやるんですわ。妻になるなんて——おおいやだ、まっぴらですわ！ 人間というものは、高尚な輝かしい目的に向かって進んで行かなければならないのに、家庭生活はわたしを永久に縛りつけてしまうにきまつてますわ。ドミートリイ・イオーヌイチ（と呼ばれて彼女はちらつと微笑ほほえんだが、それは『ドミートリイ・イオーヌイチ』と発音したとたんに例の『アレクセイ・フェオフィラークトイチ』を思い出したからだ）、ねえドミートリイ・イオーヌイチ、あなたは親切な立派な聡明なかたですわ、あなた他のどなたより優れた方ですわ……」と言った彼女の眼には涙がにじみ出た、「わたくし心の底から御同情いたしますわ、けれど……けれどあなたも分かつて下さいますわね……」

そして、泣きだすまいとして、彼女はくるりと身をひるがえすと、客間を出て行つてしまった。

スタールツエフは、今の今まで不安げに打っていた動悸がぱったり止やんでしまった。ク

ラブを出て往来に立つと、彼はまず第一にこちこちのネクタイを襟もとから引んもぎつて、胸いっぱいふうつと息をついた。彼は少々恥ずかしくもあり、自尊心も傷つけられていたし、——まさか拒絶されようとは思ひもかけなかつたので、——おまけに自分があれば、どこに夢み、悩み、望んでいたことの一切が、まるで素人芝居のけちな脚本にでもあるようなこんな馬鹿げた結末を告げたなどとは、とても信じる気にはなれずにいた。そして自分の感情が、この自分の恋がいかに不憫ふびんでならず、その不憫さのあまりいきなり手放しておいおい泣き出すか、さもなければ蝙蝠傘こうもりがさでもってパンテレイモンの幅びろな肩を、力任せにどやしつけるかしたい気がするのだつた。

それから三日ほどはてんで何事も手につかず、食事もしなければ眠りもしなかつたが、やがてエカテリーナ・イヴァーノヴナが音楽学校にはいりにモスクヴァへ出発したという噂が耳にとどくと、彼はやつと落ち着きを取り戻して、また元の生活に返つた。

そののち、自分があの晩、墓地をほつき歩いたり、町じゆう駈けずりまわつて燕尾服をさがしたりしたことを時たま思い出すと、彼はだるそうに伸びをして、こう言うのだった。——

「御苦勞千萬なとき、何しろ！」

四

四年たつた。今ではもうスタールツエフには町にもたくさん患家があつた。毎あさ彼はヂャリージでの宅診を急いで済ませてから、町へ往診に出かけるのだつたが、その馬車ももう二頭立てではなく、じやらじやら小鈴のついた三頭立てトロイカで、いつも帰りは夜がふけた。彼はでっぷり肥つて来て、おまけに喘ぜんそく息もちになつたので、歩くのが億劫でならなかつた。パンテレイモンもやはり肥つて、ずんぐりと横へ拡がれば拡がるほどますます情けなそうな溜息をつきながら、わが身の悲運をかこつのだつた。馭者稼業に骨の髄までやられたのだ!

スタールツエフは方々の家へ出入りして、ずいぶんいろんな人間にぶつかったが、その誰一人とも親しい交わりは結ばなかつた。町の連中のおしゃべりを聞いたり、その人生觀を聞かされたりすると、いやそれどころかその風采ふうさいを見ただけでさえ、彼はむしやくしやして来るのだつた。經驗を積むにつれて彼にもだんだん分かつて来たことだが、こうした町の連中というものはカルタの相手にしたり、飲み食いの相手にしたりしているうちは

温厚で、親切気があって、なかなかどうして馬鹿どころではないけれど、いったん彼らを相手に何か齒に合わぬ話、たとえば政治か学問の話をはじめたら最後、先方はたちまちぐいと詰まってしまうか、さもなければこつちが尻尾しっぽを巻いて逃げ出すほかはないような、頭の悪いひねくれた哲学を振りまわしはじめのだった。それどころか、スタールツエフが試しにさる自由主義リベラル的な市民をつかまえて、有難いことに人類はだんだん進歩して行くから、いずれそのうちに旅券だの死刑だのといったものは無くて済むようになるでしょう、例えばそんな話をもちかけると、その相手でさえじろりと横眼でさも胡散うさんくさそうに彼を眺めて、『と仰しやるとつまり、その時はみんなが往来で相手かまわず斬きって捨ててもいいわけですね?』と聞き返すといった調子だった。またスタールツエフが誰かと一緒に夜食なりお茶なりをやりながら、人間は働くということが必要ですね、働かないではとても生きて行けませんねなどと話すと、相手はきまってそれを非難と取って、怒りだしながらねちねちと議論を吹っかけて来るのだった。そのくせこの連中は仕事といったら何一つ、断じて何一つしないし、また何かに興味を持つということもないのだから、それを相手になんの話をしたものやら、とんと思案がつかなかった。でスタールツエフは談話を避けて、飲み食いやカルタヴァイ遊ントびの方だけを専門にし、仮にひよっくりどこか往診先で、家庭のお祝

いにぶつかつて食事に招待されたような時でも、席について皿の中をみつめたまま、黙つて口を動かすのであった。しかもこうした席で出る話と来たら、どれもこれも面白くもない、偏頗へんぱで愚劣なことばかりなので、聞いているだけでむしゃくしゃと癩かんしゃく癩しゃくが起きて来るのだつたが、それでも沈黙を守っていた。で彼がいつもむつつり黙り込んで皿の中ばかり睨にらんでいるもので、町では彼に『高慢ちきなポーランド人』という綽名あだなを奉つてしまつたが、彼としてはついぞポーランド人になつた覚えはなかつた。

芝居や音楽会などという娯楽からも彼は遠ざかつていたが、その代りカルタ遊ヴァイソントびは毎晩かかさずに、三時間ぐらいずつも楽しく遊びふけるのだった。それから彼にはもう一つ別の楽しみがあつて、いつとはなくだんだんそれが癖になつてしまつていたが、それはつまり毎晩ポケットから診察でかせいだ紙幣を引っぱり出してみることで、日によると黄いろや緑いろのお札さつが、香水だの、酢だの、抹香だの、肝油だのとどりの匂いを発散させながら、方々のポケットに七ルーブルから詰まつていることがあつた。それが積もつて何百かになると、彼は『相互信用組合』へ持つて行つて当座預金へ振り込むのだった。

エカテリーナ・イヴァーノヴナが立つて行つてからまる四年の間に、彼がトゥールキン家を訪れたのは後にも先にもたつた二度で、それも相変らず偏頭痛の療治をしているヴェ

ーラ・イオーシフオヴナの招きがあったからであった。毎とし夏になるとエカテリーナ・イヴァーノヴナは両親のところへ帰省したけれど、彼は一度も会わずにしまった。なんとはなしに機会がなかったのである。

ところがそうして四年たつてからだだった。ある静かな暖かな朝のこと、病院へ一通の手紙がとどけられた。ヴェーラ・イオーシフオヴナからドミートリイ・イオーヌイチに宛てたもので、近頃はさっぱりお見えにならないので淋しくてならない、ぜひお越しくださいつてわたくしの悩みを和らげて下さいまし、なおちようど今日はわたくしの誕生日にも当たりますので、という文面だった。その下の方には追つて書きとして、『ママのお願いにわたくしも加勢をいたします。ネの字』とあった。

スタールツエフはちよつと考えたが、その夕方になるとトゥールキン家へ馬車を走らせ
た。

「やあ、ようこそどうぞ！」とイヴァン・ペトロヴィチが眼だけで笑いながら彼を出迎
えた。

「ボンジュール」

ヴェーラ・イオーシフオヴナは、めつきりもう年をとつて髪も白くなっていたが、スタ

ールツエフの手を握ると、とつてつけたように溜息をついて、こう言った。――

「ねえ先生、あなたはわたくしに懇いんぎん懃をお寄せくださる思召しがおありなさらないのね、さつぱりわたくしどもへお見えにならないじゃありませんの、どうせあなたには私なんぞもうお婆さんですものね。でもそら、若いのが参つておりましてよ。この人の方はわたくしより持てそうですわねえ」

さてその猫ちゃんは？ 彼女は前よりも瘠せて、顔の色つやが落ち、それと同時に器量もあがれば姿もよくなっていた。しかしこれはもうエカテリーナ・イヴァーノヴナで、猫ちゃんではなかった。もはや以前の新鮮さも、子ども子どもした罪のない表情もなかった。その眼ざしにも身のこなしにも、何かこう今まではなかったもの――遠慮がちなおどおどした様子があつて、現にこのトゥールキンの家にいながら、まるで今ではもうわが家にいる心地がしないといったふうだった。

「ほんとに幾夏、幾冬ぶりでしょう！」と彼女はスタールツエフに手をさし伸べながら言つたが、胸の動悸がはげしく打っていることはありありと見てとられた。そしてじいっと、さも物珍しげに彼の顔にみいりながら、彼女は言葉をつづけた。「まあなんてお肥りになつて！ 日に焼けて、大人っぽくおなりになつたけれど、でも全体にはあまりお変わりに

なりませんのね」

いま見ても彼はこの人が好きになれた。それどころか大いに好きになれたが、しかし今ではこの人に何か足りないもの、さまなければ何か余計なものがあつて——もつとも彼自身にも明らかにこれと名指すことはできなかつたが、とにかく何かしら、もはや彼に以前のような感情を抱くことを妨げるのだつた。彼の氣に入らなかつたのは彼女の蒼白さ、むかしはなかつた表情、弱々しい微笑、それから声だつたが、しばらくすると今度はもうその衣裳も、彼女のかけている肱掛椅子ひしかけいすも氣にくわなくなり、すんでのことで彼女をもううところだつた過去の記憶にも何やら氣にくわぬものが出来てきた。彼はかつて四年まえにわが胸をかき乱していた自分の思慕や夢想や望みを思いだして、変にくすぐつたい氣持になつた。

甘いドーナツツでお茶を飲んだ。それからヴェーラ・イオーシフオヴナが小説の朗読にかかつて、ついぞこの人生にありようもない絵そら事を読み上げて行つたが、スタールツエフはそれに耳を傾けたり、彼女の美しい白髪あたまを眺めたりしながら、お仕舞いになるのを待つていた。

『無能だというのは』と彼は考えるのだった、『小説の書けない人のことではない、書い

でもそのことが隠せない人のことなのだ』

「悪しくもない」とイヴァン・ペトロヴィチが言った。

それからエカテリーナ・イヴァーノヴナがピアノを騒々しく長々と弾いて、それがやつと済むと、みんなで長いことお札を言ったり感心したりした。

『よかったなあ、この人をもらわないで』とスタールツエフは思った。

彼女は彼の方を見つめていて、その様子はどうかやら彼がお庭へ参りましようと言い出すのを待っているらしかったが、彼は黙っていた。

「ねえ、すこしお話しを致しましょうよ」と彼女は歩み寄って来てそう言った。「いかがお暮しですか？ 何をしています？ どうですか？ わたくしこの頃はずつとあなたのことばかり考えておりましたのよ」と彼女は神経質な調子でつぶやいた。「お手紙を差しあげようかしら、自分でチャリッジへお訪ねしてみようかしらと思って、とうとうお訪ねすることに決めたんですけど、またあとで思い返しましたの——だって現在あなたがわたくしのことをどう思っていて下さるのか分からないんですもの。わたくし本当にわたくししながら今日のおいでをお待ちしておりましたのよ。後生ですわ、お庭へ参りましようよ」

二人は庭へおりて、四年前と同じように、あの楓かえでの老樹の下にあるベンチに腰をかけた。

暗い晩だった。

「ねえ、いかがお暮しですか？」とエカテリーナ・イヴァーノヴナがきいた。

「相変らずですな、まあどうにかやっていますよ」とスタールツェフは答えた。

それ以上のことは何一つ考え出せなかった。二人はしばらく無言だった。

「わたくし何だか落ち着かないで」とエカテリーナ・イヴァーノヴナは言って、両手で顔をかくした。「でもどうぞお気になさらないでね。家に帰ってみると本当によくって、みなさまにお会いできるのが本当にうれしくて、まだすっかり慣れきれませんの。いろんな思い出がありますわねえ！ わたくしこんな気がしていましたの、あなたと二人でさぞのべつ幕なしに、夜が明けるまでおしやべりをするのでしようって」

いま彼にはちかぢかと彼女の顔やきららかな眼が見えるのだったが、こうして暗がりの中にいると、彼女は部屋の中にいるときよりも若々しく見え、そのみか以前の子ども子どもした表情がもとに戻って来たようにさえ思われた。実際また、彼女はあどけない好奇の眼をみはって彼の顔をみつめていたのだ。それはさながら、いつぞや自分にあれほど熱烈な、あんなに濃こまやかな、しかもあんなにも報いられぬ愛情を寄せてくれた男を、もつと近く寄ってつくづく眺め、その人柄を呑み込もうとするかのようで、彼女の瞳は男のか

つての思慕に対する感謝の色をたたえていた。それを見ると彼には、あの頃あったこと的一切が、墓地をさまよい歩いたことから、やがて夜明け近くになってくたくたの体^{てい}でうちへ帰ったことまで細大もらさず思い出されて、急にもの悲しくなり、過ぎし日が惜しまれるのだった。胸の中で小さな火がちよろちよろ燃えはじめた。

「あの覚えておいでですか、舞踏会の晩あなたをクラブまでお送りした時のことを？」と彼は言った。「あのときは雨が降っていて、真つ暗で……」

小さな火はいよいよ燃えあがつて、とうとう無性にしゃべりたくなつた、生活の愚痴がこぼしたくなつた……。

「いやはや！」と彼は溜息まじりに言った。「あなたはいま、私がどう暮しているかとお尋ねでしたつけねえ。こんなところでどう暮すも何もあるもんですか？ ええありやしませんとも。年をとる、肥る、焼きがまわる。昼、そして夜、——あつという間に一昼夜、人生はただもやもやと、なんの感銘もなく、なんの想念もなく過ぎてゆく。……昼のうちには儲け仕事、晩になるとクラブがよい、おつきあいの相手と来たらカルタ気ちがいか、アルコール中毒か、ぜいぜい声の痰^{たん}もち先生か、とにかく鼻もちのならぬ連中ばかり。何のいいことがあるもんですか」

「でもあなたにはお仕事が、生活の高尚な目的がおりですわ。あなたは御自分の病院の話をなさるのがあんなにお好きでいらしたじゃありませんか？ わたしあの頃はとてもおかしな娘で、一人で大ピアノニストのつもりになっていましたの。今ではどこのお嬢さんでもピアノぐらいお弾きになりますけど、わたしもつまりは皆さんと同じように弾いたただけの話で、べつにこの私にとり立ててこれというほどのものなんかありはしなかったんですわ。わたしのピアノニストは、ママの小説家と同じことなんですわ。それにもちろん、あの時のわたしにはあなたという方が分かりませんでしたけれど、その後モスクヴァへ行つてからは、よくあなたのことを考えるようになりましたの。実はあなたのことばかり考えておりましたの。本当になんという幸福でしょう、郡会のお医者さんになって、お気の毒な人たちを助けたり、民衆に奉仕したりするのは。まったく何という幸福でしょう！」とエカテリーナ・イヴァーノヴナは夢中になって繰り返した。「わたしモスクヴァでああなたのことを考えるたびに、とてももう理想的な、けだかい方に思えて……」

スタールツエフはふと、自分が毎晩ポケットからほくほくもので引っぱり出す例のお札のことを思い出し、胸の小さな火が消えてしまった。

彼は母屋おもやの方へ行こうと立ちあがった。彼女はならんで彼と腕を組んだ。

「あなたはわたしがこれまでに存じ上げたかたの中で一ばんお立派なかたですわ」と彼女はつづけた。「これからお会いしましょうね、そうしてお話しを致しましょうね、そうじゃなくって？ 約束して下さいましな。わたしピアノなんかじゃありませんし、もう自分のことであれこれ迷ったりなんぞもしませんわ。それからあなたの前ではピアノも弾きませんし音楽の話もしませんわ」

一緒に家の中へはいって、夜のあかりのもとで彼女の顔や、自分にそそがれている悲しげな、感謝にみちた、さぐるような眼を見たとき、スタールツエフはふつと不安におそわれて、またしてもこう考えた。

『よかつたなあ、あのときもらうちまわらないで』

彼は別れの挨拶をしはじめた。

「夜食もあがらないでお帰りになるなんて、そんなローマ法がありませんよかな」とイヴァン・ペトロヴィチは彼を送つて来ながら言うのだった。「それじゃあなた、何ほ何でも垂直きわまるなさり方ですなあ。おいおい、一つ演やつてごらん！」彼は玄関でパーヴァに向かつてそう言った。

パーヴァはもはや子どもではなく、口くちひげ髭を生やした一人前の若者だったが、それが見

得を切つて片手をさし上げ、悲劇の声色こわいろでこう言った。――

「ても不運な女やつ、死ぬがよい！」

こうしたことが一々みんなスタールツエフの癩かんに障るのだった。馬車の中に腰をおろしながら、かつては自分にとつてあれほど懐かしく大切なものだった、黒々とした家や庭を眺めやつて、彼は何かから何まで――ヴェーラ・イオーシフオヴナの小説のことから、猫ぢやんの騒がしい演奏のこと、イヴァン・ペトロヴィチの駄洒落だじゃれのこと、パーヴァの悲劇の見得のことまで一ぺんに思い出して、町じゆう切つての才子才媛がこんなに無能だとすると、この町というのはい体しろものどんな代物しろものなんだろうと考えた。

それから三日するとパーヴァがエカテリーナ・イヴァーノヴナの手紙を持ってきた。

『あなたはちつともお見えになりませんのね。なぜですか？』と彼女は書いていた。『もうわたくしどもをお見かぎりではないのかと案じております。本当に心配で、それを考えただけでもこわくなります。どうぞわたくしを安心させて下さいまし。おいでになつて、
――一言ひとことそんなことがあるものかと仰しやつて下さいまし。』

ぜひちよつとお話し申し上げたいことがありますの。あなたのE・T・』

彼はこの手紙を読みおえると、ちよつと考えてからパーヴァに言った。――

「なあ君、今日は伺えませんかと申し上げてくれ、とても忙しいからって。伺うにしても、そうさな、三日ほどあとになりましようってな」

しかし三日たち一週間たったが、彼は依然として行かなかつた。ある日などはちようどトゥールキン家の前を通りかかつて、せめて一分間でも寄らなくちや悪いなと思ひ浮かんだが、ちよつと小首をひねって……寄らないでしまった。

でそれ以来というもの、彼はもう二度とトゥールキン家の鬨しきいをまたがなかつた。

五

それからまた何年かが過ぎた。スタールツエフはますますふとつて脂あぶらぎつて来たので、ふうふう息をつきながら、今では頭をぐいとうしろへ反そらして歩いている。ぶくぶくに肥つた赭あから顔の彼がじやらじやら小鈴のついた三頭トロイカ立てに乗つて、これもぶくぶくに肥つて赤ら顔のパンテレimonが肉ひだのついた頸根くびっこを見せて馭者台に坐り込み、両の腕をまるで木で作りつけたようにまつすぐ前へ突き出して、行き会う通行人に『右へ寄れよお！』とどなりながら行くところは、まことにすさまじい限りの光景で、乗つて行くのは人

間ではなく、邪教の神かなんぞのように思われる。彼が町にもっている患者先の数は大変なもので、ほっと息をつく暇もない有様だし、今ではちゃんと領地もあれば、町には持家が二軒もあるという豪勢ぶりだが、その上にまだ彼はもう一軒、も少し収入みいりのよさそうな家を物色している。で例の『相互信用組合』で、どこそこの家が競売に出ているという話を聞くと、彼は遠慮会釈もなくその家へ押しかけて、ありったけの部屋を端から通り抜けながら、着るや着ずの姿で彼の方を驚き怖れつつ眺めている女子どもには目もくれずに、扉口とぐちへ一タステツキを突っ込んでこう言うのである。――

「これが書齋か？　これは寢室だな？　そっちは何だ？」

そう言いながらふうふう息をついて、額の汗をぬぐうのである。

彼は用事が山ほどあるくせに、それでも郡会医の椅子は投げ出さない。欲の一念にとっつかれてしまって、そっちもこっちも間に合わせたのである。チャリージでも町でも彼のことを簡単にイオーヌイチと呼んでいる。――『イオーヌイチはどこへお出掛けかな？』とか、『イオーヌイチを立会いに頼むとしようか？』とかいったぐあいに。

咽喉のどが脂肪ぶくれに腫れはふさがったせいだろうが、彼は声変りがして、ほそい甲高い声になった。性格も一変して、気むずかしい癩癩もちになった。患者を診察する時も、まず

大抵はぷりぷりしていて、もどかしげにステッキの先で床をこつこつやりながら、例の感じのわるい声でどなり立てるのである。――

「お訊ねすることだけにお答えなさい！ おしやべりはしないで！」

彼は孤独である。来る日も来る日も退屈で、彼の興味をひくものは何一つない。

彼がチャリッジに住むようになってから今日までを通じて、猫ちゃんに恋したことが後にも先にもたった一つの、そして恐らくはこれを最後の悦びごとであった。毎ばん彼はクラブへ行ってカルタ遊びをやり、それから一人つきりで大きな食卓へ向かって夜食をとる。彼の給仕をするのはイヴァンという一番年のいった長老株のボーイで、十七番の＊ラフィットを出すのがおきまりだが、今ではもうクラブの世話人からコックやボーイに至るまで、一人のこらず彼の好き嫌いを呑み込んでいて、ひたすらお気に召すようにと精根を傾けている。やりそこなったら最後、まず碌なことはなく、やにわに怖然と色をなして、ステッキで床をこつこつやりだすのが落ちである。

夜食をやりながら、彼は時によると振り返って、何かの話に割り込んで来ることもある。

「それはあなた何のお話ですか？ はあ？ 誰の？」

またどこか近所の食卓で、談たまたまトウルキン家のことに及んだりすると、彼はこんなふうになぜねる。――

「それはあなた、どこのトウルキンのお話ですか？　あの、娘さんがピアノを弾きなさるうちのことですか？」

彼の方のお話はこれでおしまいである。

さてトウルキン家の方は？　イヴァン・ペトロローヴィチは年もとらず、ちつとも変わらないで、例によって例の如くのべつ洒落のめしたり一口噺をやったりしている。ヴェーラ・イオーシフォヴナはお客の前で自作の小説を、例の心しんから気置きのない態度で、相変らずいそいそと読んできかせる。さて猫ちゃんちゃんは、ピアノを毎日毎日四時間ずつも弾いている。彼女は目だつて年をとつて、ちよいちよい病気をするようになって、秋になるときまつてクリミヤへ母親と一緒に出掛けてゆく。イヴァン・ペトロローヴィチはふたりを停車場まで送つて行き、汽車が動きだすと、涙をぬぐつてこう叫ぶ。――

「さようならどうぞ！」

そしてハンカチを振る。

訳注

『楯あかり』の唄——ロシヤ農家の宵の情景をうたった哀調ゆたかな民謡。ただし楯とは言つても囲炉裏いろりにくべるのではなくて、白樺しろかばなど脂あぶらの多い木の楯を暖炉の上に立てて蠟燭ろうそく代りにもするのがロシヤの貧しい農家のならいであった。

「死ね、デニース……」云々——この文句は、ロシヤ十八世紀の諷刺劇の大家デニース・フォンヴィージン一代の傑作『わか様』Nedorosjが初演（一七八二年）された際、時の権臣ポチョームキンが感嘆のあまり発した言葉。「死ね、デニース、それともはやいっさい書くな」の形でも伝えられている。

ピーセムスキイ——十九世紀中葉に活躍したロシヤ作家。長篇小説『千の魂』はその代表作の一つ。

『……のときたらん』——墓地の門の上に弓なりに渡したアーチに、「墓にある者みな神の子の声をききて出づるときたらん」（『ヨハネ伝』第五章二十八節）の章句が記してあったのであろう。

ラフィット——ボルドー産赤ぶどう酒の一種。

青空文庫情報

底本：「可愛い女・犬を連れた奥さん 他一篇」岩波文庫、岩波書店

1940（昭和15）年10月5日第1刷発行

2004（平成16）年9月16日改版第1刷発行

※底本では「訳注」に底本の頁数が書かれています。

入力：佐野良二

校正：阿部哲也

2007年12月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

イオーヌイチ

JONYCH

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>